

この本をお使いくださる方々へ

1 誰が使うの？

地域の日本語教室で日本語指導や日本語学習支援を行っている方々を対象とした研修や日本語学校などの日本語教育機関で教えている方々を対象とした研修でお使いいただくことを想定しています。すでに日本語を教えた経験をお持ちの方々のほうが、マンガの中に描かれている出来事を身近なこととして捉えやすいかと思いますが、これから外国人に日本語を教えたいと思っている方々、日本語学習者などのようにやりとりをしたらいいかかわからない、といった方々にも十分活用していただけるのではないかと考えています。

2 どんな構成？ その意図は？

今回は、第1話から第6話までマンガを用意しました。マンガには日本語教室の様子が描かれていますが、それぞれのマンガの後に、タスクと「第〇話について」という解説がついています。マンガ、タスク、解説が一つのセットです。以下、それぞれについて説明します。

(1) マンガ

4ページから6ページのマンガです。二つのタイプがあります。

一つは、教師の最初の問いかけは同じで、その後の展開が異なるものです。それぞれをパターンA、パターンBとしました。教師は教室の中で、あらゆる状況に対して瞬時に判断をし、多種多様な行動をとっています。言葉のやりとりにおいても無数の展開が考えられますが、まず第1話と第2話では、学習者とのやりとりの仕方についてそれぞれ二通りのものを対比的に示し、両者の特徴を比べることにしました。二つを比べることは、教師の問いかけや行動についての様々な可能性を考える足掛かりとなると思います。

もう一つのタイプは、学習者と教師のやりとりを追い、一つのエピソードにしているものです。第3話から第6話までがそれに相当します。一つの流れをじっくりと読み、それについて掘り下げること意図しています。

尚、それぞれのエピソードは、模範として示すわけでも、問題行動として取り上げるわけでもありません。あくまでも、実際によくあることとしてまずは読んでいただき、その次のページに示されている「タスク」に取り組んでいただきたいと思えます。

(2) タスク

エピソードの中の、特に注目をしていただきたい部分について、いくつかの質問を設けました。質問のタイプには、教室の中で何が起こっているかを確認するもの、学習者の立場になり、考えや気持ちを想像するもの、その場での教師の考えについて意見交換するもの、何かが起こった場合の原因・理由を探るもの、自分だったらどうす

るかを考えるものなどです。

この本は、一人で読み進めるよりも、研修などの場で、複数の人たちで一緒に読むことをお勧めします。タスクを行う際は、それぞれの質問についてまず一人で答えを出し、その後、グループで話し合ってみるのがいいと思います。タスクに示されている質問には、唯一の正解というのはありません。質問に対する答えを比べてみると、同じマンガの同じシーンを見ているのに、自分とは異なる見方や考え方を知ることになると思います。驚くような意見に触れるかもしれません。タスクを他の人たちと一緒に行うことが、自分がいつも行っていること、自分の見方や考え方を探るきっかけとなり、授業には様々な可能性があるということを知る機会になればと思います。

(3) 「第〇話について」

この「第〇話について」は、マンガとタスクについての解説です。タスクについて、グループでのやりとりが終わってからお読みください。ここには、タスクの意図、質問に対する答えの可能性、マンガに描かれたシーンについてより深く考えるためのヒントや情報、などが書かれています。授業を収集・分析し、このマンガの原案やタスクを考えたい私たちのメッセージが記されていると言えるでしょう。そして、マンガの元となった授業データに関する研究の成果について触れている場合もあります。研究成果は、教師が授業や学習者についてなんとなく感じていたことについて納得のいく説明をしてくれたり、自分の行動を変える理由になったりするでしょう。

3 マンガは実話ですか？

「はじめに」にも書いたように、マンガは複数の現場で共通して起こっていることを集約的にエピソードとしてまとめました。そのため、マンガの中のやりとりは、実際の教室でのやりとりと全く同じということではありませんが、なるべく実際のやりとりを生かすようにしてあります。

4 質問に正解がないなんて…。

そう考える方もいらっしゃると思います。また、グループで話し合っていると、一つの意見にまとまっていくことがあり、それが正解だと思うかもしれませんが、あるいは、「私たちの教室では、こういうことは避けましょう」とか、「この姿勢を大切にしよう」といった合意に至ることもあるでしょう。逆に、意見や考えが対立してしまう場合もあるかもしれません。そういう時は特に、「正解は？」と聞きたくなるだろうと思います。

日本語の学び方や教え方、授業の進め方、学習者と教師のやりとりに「最善の方法」というのはありません。外国語教授法というものが時とともに変遷してきたように、ことばやコミュニケーションに関する考え方、学習観や学習者観も変わり、教師の役割も多様化しています。ことばの学びや言語習得をどう捉えるか、言語学習・教育の中に教師をどう位置づけるかによっても、「教師」のふるまい方は異なってくるでしょう。ある考え方に基づけば正しいと思われることも、別の見方をすればふさわしくないということもしばしばです。そして、今の自分の考えと数年後の考えが違うという

こともあるはずですが。

ただ一つの答えを求めるのではなく、現場で起こっていることをぜひ、複数の視点・観点から見ただけ、自分の考え方や教室内でのいつもの行動に向き合っているだけだと思います。

5 「10分話について、どのぐらいの時間をかけたらいいの？」

研修の目的や規模により、時間のかけかたは様々になると思いますが、できれば、じっくりと時間をかけて考えたり話し合ったりしていただきたいと思っています。マンガを読むのに数分、質問一つについて自分なりの答えを出すのに数分、周りの人と意見交換するのに十分ぐらい、というようにやっていると、おそらく、タスクを終えるのに二、三十分は少なくともかかると思います。そして、解説を読み、それについてまたグループで意見交換をしたりすると、そこでまた二十分ぐらいはかかるでしょう。解説の内容によっては、もっと時間をかけたほうがいいかもしれません。このように考えると、一つの話を選ぶのに最低一時間はかかると思います。

6 地域の日本語教室でも「先生」とか「教師」という呼び方を使うのですか？

生活者としての外国人を対象とした日本語教室には、その教室の目的によって様々な立場の人がおり、「支援者、指導者、日本語ボランティア、日本人参加者、先生、教師」などと呼ばれています。そして、昨今は、多文化共生社会を目指すのなら、対等性を維持するために「先生」などという言葉は排除すべきだ、という考え方もあります。この本では、取り上げる教室の状況や目的、そして文脈に合わせて「先生」、「教

師」、または「支援者」を使うことにしました。

7 他の話も読んでみたい、研究についてもっと知りたい場合は？

現在、マンガを追加する準備をしています。随時、ウェブサイトで公表していく計画です。また、この本に関連する研究については、学会発表や論文などを通じて公表をしていきます。これらの情報をまとめたウェブサイトを用意しましたので、「探究しよう『日本語教室』」で検索してみてください。

実際にお使いいただき、ご質問、ご意見など、遠慮なくお寄せいただけたらと思います。また、お使いいただいた際の様子や感想などもお知らせいただけたら幸いです。

日本語教室をのぞいてみると もくじ

はじめに

この本をお使いくださる方々へ

v ii

第①話

おしゃべりするのは誰のため？

1

タスク

7

第1話について

8

第②話

私に興味はありますか？

9

タスク

13

第2話について

14

第③話

気づいてほしいな、間違いに

15

タスク

19

第3話について

20

第④話 日本に嫁いできました

タスク

21

第4話について

27

28

第⑤話 喫茶って何？

タスク

29

第5話について

33

34

第⑥話 え、そんなこと急に言われても

タスク

35

第6話について

39

40